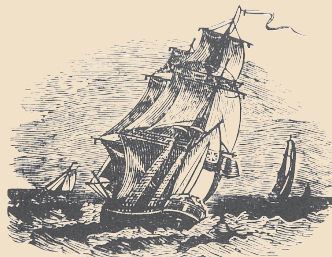


# 羅針盤



## 多種多彩な皮膚感染症

福田 知雄

Tomoo Fukuda

杏林大学医学部皮膚科 学内講師

感染症とは、細菌、ウイルス、真菌、寄生虫等の病原体の感染により、宿主に生じる望まれざる反応の総称である。感染症の歴史は生物の発生と共にあり、有史以前から現在に至るまでヒトの疾患の大部分を占めてきた。

皮膚科領域においても感染症が占める割合は大きく、時代の変遷により増えてきた疾患、減ってきた疾患はあるが、根絶された皮膚感染症は1980年に世界根絶宣言がなされた天然痘(痘瘡)以外にはないのではないかとと思われる。

病原体はいたる所に存在する。感染経路もヒトからヒトだけとは限らず、動物からヒト、土壌などの環境からヒトなど様々である。ヒトの皮膚、口腔・鼻腔内、腸管内に棲息している数百種類の常在菌が、宿主の免疫状態、宿主の置かれた環境により日和見感染を起こす。皮膚感染症の種類は多く、症状も多彩である。

流行期の水痘、麻疹、風疹などは比較的診断が容易であるが、症状が典型でないときにはやはり診断に悩む。ましてや、めったに見たことのない皮膚感染症の患者が来たときに診断がつけられるのか、正直私には自信がない。

今回、感染症の特集号を企画する機会が与えられ、自分だったら何を知りたいかを考えてみた。患者数の多い



足白癬、瘰癧、疣贅も大事であるが、よく聞くが見たことのない皮膚感染症、よく見るが時に診断のむずかしい皮膚感染症を対象を絞ってみるのも一案と考え、特集のテーマを「見逃しやすい感染症」に決めた。

皮膚感染症に属する各疾患をリストアップし、上記の選択基準にどの疾患が当てはまるか軽い絞り込みをかけた。最近の症例が望ましいと考え、候補疾患をわれわれが最近経験している症例を杏林

大学医学部皮膚科のデータベースで調べ、学外の発表症例を医学中央雑誌のデータベースで抽出した。抽出した症例の詳細を確認し、より今回の特集テーマに合致している症例を選び出した。テーマの決定、症例の選定にあたっては、医局の平原和久先生、稲岡峰幸先生にかなり意見を出してもらった。とても感謝している。

症例の選択後は、かなりタイトなスケジュールで執筆依頼を各先生方をお願いした。突然の依頼にもかかわらず快くお引き受け下さった執筆者の先生方に厚く御礼申し上げます。編集委員会からもいろいろと貴重なアドバイスを頂いた。好発部位の参考になるようにと各症例を部位別に分類したのもそのひとつである。

読者の皆様の日常診療で、診断に悩む皮膚感染症の補助に少しでもなってくれば幸いです。